



Title	ベルクソンの直観概念：共感と神秘的経験
Author(s)	田中，悠介
Citation	待兼山論叢．哲学篇．2012，46，p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27235
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ベルクソンの直観概念

— 共感と神秘的経験 —

田 中 悠 介

キーワード：直観，共感，持続，神秘的直観

0. 序

本論文の目的はベルクソンの直観概念の内容を検討することである。ベルクソンの哲学において、直観という概念は知的な努力であるとも内的経験との合致とも定義される。その対象として、第一に自己自身の直観が存在する一方で、テキストからは外的事物に対する直観が存在すると解することも可能である。しかし『意識に直接与えられたものについての試論』（以下、『試論』）で示される厳密な持続に関する定義を採用すれば、内的な持続の外に位置する実在に対して、直観は確実性に欠ける認識しか得られないように見える。では、ベルクソンの哲学全体を通して直観の対象はどこまでなのか、その射程を示すためにどのような定義を与えるべきだろうか。

その問に対しては、ベルクソンの直観の概念は一貫した内容を持ち、内的な経験への直観にとどまらない射程を持ちうると答えられるだろう。そして、そのことは直観概念の定義の変動ではなく、直観の前提ともなるような認識の枠組みの変化を考察することで確認される。たしかに内的直観と外的認識という二元論的な区分は退けられるべき問題としてベルクソンの哲学のうちにも存在する。その中で、内的という言葉が指示する範囲が拡大し、直観が純粹に個体に内属する持続の外へと広がっていく推移を彼

の哲学の進展に読み取ることができるのである。

また直観の概念を精査するために、直観と共感が相互に条件づけ合うものであり、諸持続の関係に向けられた概念だと分析しているLapoujadeの議論を参照する。彼の解釈では、直観は生の源泉へ向かう運動として持続を捉える作用だと定義され、それに対して共感とは直観的な認識を拡大する、直観の対象を決定するものだと考えられる。その解釈が受け入れられるならば、直観概念を明らかにするためには共感の概念も分析する必要があるということになる。同時に、直観と共感の関係が形成されるならば、個体の内的持続と宇宙全体の持続の間にアナロジーが成立していることが前提となることが主張される。そして、個体の持続と宇宙の持続にわれわれが見出すアナロジーは『物質と記憶』で定義された持続の強度の差異による世界の記述を受け入れる限りで措定しうるのである。

そこから本論では、そのようなアナロジーの実在的な成立可能性を議論するには『道徳と宗教の二源泉』（以下、『二源泉』）における神秘的直観の概念を待たねばならないということを示す。最終的に、直観と共感が持続の間に見出すアナロジーを支えるために『二源泉』における神秘的直観について語る必要があることを確認し、ベルクソン哲学における直観概念の実質を明らかにする。

1. 持続と直観

ベルクソンの哲学の中心にある概念が持続であることは間違いない。『試論』においてすでに、持続の固有性・自由こそが主張されるべきものとして登場し、それが彼の哲学の方向性を規定している。持続についての思索の展開から直観という概念は要請されるのであるから、まずは持続の性質から確かめることにする。

持続の特性は2つの方向から決定されている。経験における質的なもの

と時間的に継起する異質なるものの相互浸透が各々の持続を作りあげる。第一に経験における質的なものがある。たとえば、現在の痛みと過去に感じた痛みの心理的な実質を正確に比較することはできない。経験から考えても、「より痛い」という表現のような比較のための言葉は（2倍、半分といった）明確に計量的な意味を持たないだろう。そこで、ベルクソンは経験が質的なものを備えており、知性的なものによる分析や言語表現に還元されることはないという主張を行う。つまり、共有可能な言語による説明は、その計量化への傾向性を鑑みれば、われわれの私的経験を全面的に表すものではないのである。ベルクソンは経験の私的な性質、通約不可能性を質と量の区別を行うことで論証していると言える。

第二に持続には時間的アスペクトが存在する。私の現在の痛みは、たとえば量的には同じ痛みを想定しうるとしても、明日の痛みと同じ経験ではありえない。今日の痛みを併せ持った主体の感じる同じ痛み、そこには痛みへの慣れがあるかもしれない、もしくはより強い嫌悪感があるのかもしれない。ある痛みは次に感じる痛みの経験の質的基盤そのものを変化させる。「われわれの状態はそれぞれ、われわれが自らに与えたばかりの新しい形式であって、われわれから生じるとともにわれわれを変える」EC500以上、精神においては純粋な反復は見出されない。音楽を例にとれば、ドレミファソという旋律が成立する場合、ファの経験単独のものとドとレとミの経験を経た上でのファの経験は違う。前者は単音にすぎず、後者には旋律が見出される。現実には単独の経験を取り出そうとも、取り出されるその現在において主体は自身の過去の全体を引きずり、それによって経験の質が決定されるのである。現在の経験は主体それ自身に付け加わり（全体の性質を変化させ）、次の経験のための精神の一部となる¹⁾。すなわち、経験を解説するためには、それが全人格の表現であることを理解していなければならない。そして、持続の理論におけるこの個人的な色彩の強さは、裏を返

せば他者の経験は実質的に不可知ではないかという問題をも示すだろう。

ベルクソンは哲学や科学の既存の枠組みによる認識では把握できないもの（すべきでないもの）を経験そのものの内に回復するために直観という概念を準備することになる。つまり、直観を持ち込んだ意義は『試論』から『創造的進化』まで、一貫して自己の経験を捉えるための手法と読むことができる。なぜならベルクソンの挙げる直観の定義とは第一に「内的持続」に向かう「精神の直接的なヴィジョン」PM1273なのである。それは同時に「介在のない見られる対象と区別しがたいヴィジョン、接触であり合致」PM1273とされ、内的なものへの直観が最初にあると明言するとはいえ、それ以外対象が存在しないとは記述されないのだから、直観を外的な対象を排除するものと読む必然性はない。それでも、直観を相互浸透している経験への合致だと定義した場合、自己の外側に向けての認識には直観を提出する以前と同じく、自己の持続ではないような外部の世界、外的物質を、外形的（知性的）認識とは異なる仕方でのように捉えればよいのかという課題が残るのではないか。では、外部に想定される対象の固有性、人格の来歴、対象に寄り添った視点、このような一般的な意味で主体を超え出るものに直観はどのようにして接近することができるのか。

2. 持続の一元論と共感

しかし、ベルクソン自身はこのような困難を問題にしていらないように見える。これは彼にとって問題ではなかったと言うよりはむしろ、その困難が直観の定義自体ではなく、世界に対する記述が変化することによって解消されていることを示すと考えるべきだろう。ベルクソンの諸説に他者論が存在しないように見え、そしてそれを問題視できるとすれば、『物質と記憶』以降の著作にまで物質と精神が分離、対立するモデルを持ち込んでいるからである。個体の枠組みについての概念の読み替えと物質を含めた

世界の性質の読み替えが同時的になされていることを確認すれば、外的なものの認識が直観との関係において持ち込む問題は解消される。ベルクソンにおいて内的・外的の別は、持続とそうではないものという対立に帰着すると言えるが、厳密には、そのような対立が見られるのは、『試論』のみであり、それ以降の著作では持続の一元論へと内的・外的な二元性²⁾は解消されていく。一方で、『創造的進化』の第1章冒頭に見られるように最初に内的な持続の直観の存在を示し、それ以外の外的対象との間に差異を設ける図式自体は使われ続ける。本論文ではどのようにして、そのような自己自身への直観が特権化された様式から、外部と内部を包括しうる全体性へと向かうのか考える。ベルクソンの直観概念は一面で、自己自身の持続への直観である。それでも、『創造的進化』の論理の展開に従えば、その内的なものへの直観が拡大されて生命一般、生命の原理への合致まで思考しうるのである。

ベルクソンの直観概念に重要なのは内的-外的、精神-物質の二元論を持続の一元論に読み替えることであり、持続の強度によって世界全体（精神から物質まで）を表現する事である。ベルクソンの世界観はイメージの総体の連続性（事象界の全体が不可分な全体を構成する）と、存在の時間的性質（即自的、潜在的に存在する記憶が意識・個体として縮約、現実化されていく）という2つの論理を軸としている。ベルクソンの全体的な世界観³⁾では「宇宙は持続しているか、われわれの持続と連帯 *solidaire* している」PM1274のであり、したがって「宇宙はそれが含んでいるすべての事象的な変化および運動によって直観に属している」PM1274ということができるのである。

3. 多様な持続の間のアナロジー

では、直観は内的な持続（直接的に反省可能なもの）の他にも外的対

象を対象とし、それを正しく把握することができるのか（M・ポンティが考えるように認識の合致主義と概念化の間で分裂してしまっているのか⁴⁾）。ここで、直観の分析から持続の間でのアナロジーの成立を見出すLapoujadeの論文《Intuition et sympathie chez Bergson》を参照する。彼の議論は、個別的に経験される直観により発見される傾向と宇宙全体の持続の間でアナロジーが成立し、それは共感の作用が媒介することで可能になるというものである。そのような関係性を定義できるのならば、ベルクソンの論理の中で、直観は然るべき役割と位置を得ることになる。

Lapoujadeは共感を問題にするが、ベルクソン自身の議論において、直観の定義のうちに現れる共感という働き⁵⁾においては、主観と客観の統一への運動と感情の受容という側面が存在している。そこで共感直観の一部を為すような、あるいは同じものとして考えるべきだろうか。『創造的進化』では直観は「われわれと他の生物 *reste des vivants* との間」に「共感的伝達 *communication sympathique*」を生み出し、また「われわれの意識を膨張させ *dilatation*」で「われわれを相互浸透 *compénétration réciproque*、無際限に続けられる創造という生命固有の領域 *domaine propre de la vie* に導き入れる」EC646と記述される。ここでは端的に直観の一部として共感が現れているとも読めるし、あるいは直観の補助作用と読むこともできるだろう。

Lapoujadeはわれわれが宇宙に類比的であるものとして自らを見出すことを直観（人は直観のおかげで自己の持続からその底にある非人格的な運動、記憶、意識との接触へと至る）、逆に宇宙がわれわれに類比的なものである（外的事物、世界全体も持続するものである）と捉えることを共感と定義している。「共感直観からその条件を受取り」⁶⁾、直観は共感によって一般化、伝播・拡大が可能になる。ここでのベルクソンにとってのアナロジーは固定的な関係の外面的な類似ではなく、傾向や運動の間の内的な

共通性を問題にする。⁷⁾ 持続の強度の差異によって記述される一元的世界観において、個体の持続-傾向の発展は「それが発するところの原初的な源に遡ること」なのだから、それは宇宙の持続と類比的だと想定される。Lapoujadeはアナロジーによる論証を「われわれ固有の内的な運動と宇宙一般の運動の間でしか作られない」⁹⁾ ような「投影projectionの運動」と捉える。ベルクソンの共感とは「与えられた実在の只中で、精神や意識の存在することを発見すること」であり、それによって「われわれとその実在性が共通のものを持つこと」¹⁰⁾ が明確にされるものである。共感によって生命や物質は精神的なものともみなされ、一方で、直観によって自己の内に持続を発見することができる。両者が並立することで全体への直観が可能になるといえる。

共感と直観はLapoujade自身が指摘するようにベルクソンにおいてはセットで使用される概念であり、定義としてはほとんど差異を持たないとも言える。この2つの概念を分離するのは、概念としてよりも作用としての違いを抽出するためであり、内的な直観から外的なものの直観へといかにして橋渡しをするかという問題のためである。ここで、共感とは直観の成立する可能性を表す。すなわち、共感することは直観の可能性を拡張するとして、精神的なもの、内的直観と同質なもの（アナロジーの成立するもの）を外部に認めることを意味する。

それでは、直観と共感の相互条件付けが存在するということはどのようにして見出されるのか。われわれの内なる持続と宇宙の持続のアナロジーは証明されるべき事実であろうか。『創造的進化』におけるベルクソンはLapoujadeの議論と対応する理論構成を行なっているといえる。そこでは「直観があらかじめその実在性と共通のものを我々が持っていることを明確にしていなければ」¹¹⁾ 直観と共感のこのような関係は成り立ち得ないことが認められている。ベルクソンは、生物学的な研究を土台として生命の

エランを想定し、それが生命全体を貫いていることを論証する。この過程のうちには共感と直観の関係性と可能性が見出される。とは言え、そのような解釈を妥当にする事象を経験から抽象し想定されたものとしてではなく、経験そのもののうちで確認することを求めるなら、『二源泉』を、神秘的直観を待たねばならない。

4. 神秘的直観

『二源泉』で初めて現れる概念である神秘的直観 *intuition mystique* は、ベルクソンの定義するところの神秘家が到達しうる直観であり、それは生命そのものとの合致をその定義とする。「直観は内面 *dedans* に向けられたもの」で、「第一の強化によってわれわれの内的生命 *notre vie intérieure* が捉えられ」、その直観を得た神秘家は「われわれの存在の根底 *racine*」、同時に「生一般の *la vie en général* 根源」MR1187へわれわれを導いていこう。¹²⁾ われわれが直観によって生命の原理に入り込もうとするなら、「彼らが感じるものを共感的に受け入れる」ES834ように務めるべきであり、共感と直観の関係からは、むしろそのように持続へと方向づける作用の伝達が存在することが重要になる。

ドゥルーズは感情 *émotion* に神秘的直観の特質を見る。感情は「人格的 *personnelle* であるが、個人的 *individuelle* ではない」¹³⁾ ものであり、宇宙的な持続・記憶の具体化として神秘家の内に創造的感情が産出されるのである。共感と直観の関係から見れば、共感の経験とは自己の外の対象からの感情を受け取る、あるいは感情に入り込むことが可能である関係性の存在を指し示し、そこで人は自己の人格、個人の身体利害に基づいた知覚の枠組み自体を拡張させる情動を受け取る。

ここで、問題となる個体や人格について少し分析してみる。『物質と記憶』を参照すれば、個体性は特定の身体-運動図式に応じた知覚のアスベ

クトによって定義され、個体の知覚は全体から切り取られた部分、各々のパースペクティブであり、身体の利害に従ったイマージュの選択という操作の結果として生じる。ある経験主体というものを想定すれば、そこで直観は自己の経験の純粹なものとして人格性そのものを運動として捉え、そのような自己の固有性と一致する行為である。¹⁴⁾一方で、注意の欠如の度合いが上がるに連れ、個人はその個人的部分をなす物質的な条件付けから離れ、没個人的な相へ接近する。¹⁵⁾これらの交差する点で、持続への合致という直観の運動は個体的・個人的なものを前提としつつも、そのような条件を固守しない、開かれたプロセスになる。ジャンケレヴィッチを引けば、ベルクソンの意味での实在論とは「対象 *objet* のない主観 *sujet* の直観と、主観をまじえない対象の直観を行ったり来たりする」¹⁶⁾ ものなのである。

『二源泉』4章で、ベルクソンは生の注意が身体機構の乱れによって変化し、そのことが心霊的なものを受容する基礎となるということを述べている。身体は行動の手段であり、また「知覚作用の妨げ *empêchement*」でもある。ここには我々にとっての「不要な *inutile* 対象の知覚」は自身の意識から排されると考える『物質と記憶』の身体観（身体は「ろ過装置 *filtre* もしくは遮蔽幕 *écran*」にほかならない MR1243）が残っている。すなわちベルクソンは共感作用としての直観と生への注意からの離脱に相補性を認める。個体的な認識からの超出も生命の原理への直観、すなわち神秘的直観¹⁷⁾に至る途上にあるのである。

Vieillard-Baron はベルクソンにおける時間と直観の歩みについて述べる中で、第一の段階としてわれわれの持続と現働化された身体との合致を、第二の段階として物質一般との合致への拡大、そこから第三の段階としてすべての持続の個体的意識の間を流れる「非人称的な意識」との合致へと進むと論じている。¹⁸⁾ その流れが志向するものは神秘家や特権的な人格と

される人々の感情と方向性を同じくするものであり、同じ場所に収束していくのである（われわれの奥底に神秘家の情緒に反応する何かを見出す図式の基礎はここにある）。例えば、神秘的直観と哲学者の直観は対象の領域を異なるものとしている。神秘家は生命そのものの源泉に、哲学者はそこから生まれた感情を受容し、その上で直観が可能になる。そこに類比的な関係を想定することもできよう。一方で、それでも後者が生のための注意に縛られているという事実は残る。共感によって神秘家の感情を受容するが、それが進化という文脈と結びつく直観になるためには、身体的な段階での個体の決定を排除する特別な性質もまた必要とされる。¹⁹⁾

ここまで見てきたように直観は極限的な形においては全体への接近、一般性への超出という段階を含み、前述の生の原理の直観と生への注意からの離脱という2つの流れは最終的に同じ運動を示すことになるのである。

そして、神秘的直観が提起されることで、『創造的進化』における進化論の考察から想定された生のエランの全体性が経験の水準において書き直されることになる。生への注意という議論も、直観と共感の相互の条件付けを可能にするものも神秘的直観の中で再び見出されるのである。

5. 結語

Lapoujadeは『創造的進化』までを議論の中心に据え、『二源泉』については詳細に分析していない。では、共感という作用は神秘的直観の概念が登場する文脈においては対称的な作用なのか。『二源泉』での共感の主体は誰なのか。神秘的直観の主体である神秘家はすでに生命の原理に到達している。物質的なものが障害にならない、と言われるように、神秘的直観において必要とされるのは内的な直観だけであり、それがそのまま全体の、持続の源泉への直観となっているのだ。共感という言葉を使うとき、外的に存在する物質を「精神的なものにする」という意味ではLapoujade

は直観へ登っていく精神、神秘的直観と類比的な直観へと向かう人たちを対象とし、直観を「伝播・展開させる」という意味では、感情の受取り手に対してそのような態度、共感を準備させるという作用を指しているのだろう。Vieillard-Baronが示すところの直観への段階の各々において共感とは多様なアспектを見せるが、それを生む共感と直観の関係性はLapoujadeが定式化したものと同一である。すなわち、直観へと人を動かすためには共感可能性が求められ、共感可能性の条件として直観の存在が必要である、という議論は神秘的直観の文脈からも読み取ることが出来る。

このように、神秘家は共感を基礎付けるような直観を持っている。彼ら自身は物質性を乗り越えた地点にいる。したがって、そこでの外部に対する認識はすでに内的な直観と統合されているといえる。そして神秘的直観を獲得した者は存在そのものが共感作用を引き起こす「呼びかけappel」MR1003であるとベルクソンは規定する。ここで、生命の原理を直観する神秘家に対して、触発される側の人々は神秘家との関係のうちで外的なものを持続として受け入れることへと促される。それは我々自身が自己との合致という形で直観の作用を得ることの端緒ともなるはずである。神秘家とわれわれの関係の中で、われわれの神秘家に対する共感（それは観念やイメージの後に起こるものではなく、それらに先行した「知性以上の」情動の受容でなければならない）が見出される。つまり、われわれが神秘的直観に由来する感情を受け取る事が可能であること、そしてそれが神秘家の直観に条件付けられていること、これらが単に類比的な認識としてではなく、経験的に、内的直観の内で見出される。そのことは様々な水準における直観相互のアナロジーをも示すことになる。²⁰⁾

ここで、感情の授受・伝播としての共感と、直観を拡張する様式としての共感がベルクソンの哲学においては同一の運動の、互いの存在を指示しあう2つの側面であることを見て取ることができる。神秘家の感情を受

け入れ、一体化することで人が「これほど自己自身であったことがない」MR1189という感覚を持つことはアナロジーの存在、持続の連帯の存在を支持する。ベルクソンが直観と言う場合には自己自身の異質的相互浸透の全体へと合致することが第一義にあるが、直観が合致していくべきその土台を共感という作用が知覚の変化を通して揺らし、拡大するのである。他方、共感の経験は直観的な自己把握と宇宙の持続に同型性、アナロジーが可能であることをその伝播の基礎とする。共感として情緒を受け取る事は他性の導入とも言えるものであり、それは持続の間を流れる生命への参照を喚起する。最も非持続的なものである物質のうちにさえ持続のアナロジーを見出すことを可能にすることが共感の役割なのである。神秘的直観は自己の外から受け取る感情を、内的なものとして受け取れるように変換するための視座を与える。そこで、直観は個体に相対的なものから世界の全体へとその作用を広げていくのである。

ここには、本論で述べてきたような、物質や生命各々の持続の多元性とそのような世界の持続すべてがつながった、潜在的な多数性を含んだ全体の持続が存在するという見方が直観のベースとして存在している。『試論』でのベルクソンにとっては自己の持続は特別なものであり、そこにおいてこそ確実性が哲学に確保される。この立場を捨てるかわりにベルクソンが用意したのは私という内的経験の概念領域の拡張と感情を中心とした作用関係なのである。

注

ベルクソンの著作はHenri Bergson, *Œuvres Édition du centenaire*, PUF, 1970による。それぞれの著作のページ数は『全集』のものを使用する。各著作の略称は以下のとおり

DI = *Essai sur les données immédiates de la conscience*『意識に直接与えられたものについての試論』

MM = *Matière et mémoire* 『物質と記憶』, EC = *L'évolution créatrice* 『創造的進化』

MR = *Les deux sources de la morale et de la religion* 『道徳と宗教の二源泉』

PM = *Pensée et Mouvement*, ES= *L'énergie spirituelle*

- 1) ベルクソンにとってメロディとリズムは異なる意味を持つ。メロディは経験の相互浸透によって持続を形作る。リズムとは持続に内属する意識の緩急、経験を構成する縮約の仕方に関わり、リズムは持続の各々に固有の多元性を許す
- 2) ベルクソンにとっての二項は直観の対象となる精神と知性的に認識することが可能な物質である
- 3) 諸持続の間にリズムの差異しか見いだせないこと、そしてすべての持続がある種の連続性を持つと想定することはすでに『物質と記憶』で示されていた。主観－客観の区別以前のイメージの世界を措定し、身体の有用性によって制限されない純粹記憶（個別の人格はその制限と共に現働化actualiserする）を措定し、その縮約の度合に従って持続の強度を考えるのである。また弛緩の究極の形として物質を反復するものとして捉え、持続的な存在（人間）をその対極に置くことで理念的には分割の方法も保持していた。
- 4) Merleau-Ponty, *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson*, 1968, Vrin,において彼はベルクソンの直観概念が①合致主義 concordisme と②概念化（記号と事実の結びつけにより、認識すべきものを捉え直そうとする）の二種類の方向性を持ち、その直観の定義は著作ごとに揺れ動いていると指摘している
- 5) 自己自身への共感という場合は直観の説明になる
- 6) David Lapoujade, « *Intuition et sympathie chez Bergson* », in *Annales bergsonniennes Tome 3 ; Bergson et la science*, PUF, 2007, p.447
- 7) 「ベルクソンにおいては運動や傾向の間にしかアナロジーはない」 Ibid, p.435
- 8) Ibid, p.436
- 9) Ibid, p.437
- 10) Ibid, p.437
- 11) Ibid, p.440
- 12) ただし『二源泉』4章の記述によれば、神秘的なものと機械的なものは互いに呼び合う関係にあって、それを神秘的作用の方へ全面的に還元する手法は取れない。そもそも「彼岸のもの」という記述を他者性のように扱う事がで

きるかどうかについては検討が必要だろう

- 13) Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, PUF, 1966, p.116
- 14) ベルクソンは人格 *personnalité* について、いわゆる自我といったものではなく、単に経験の流れを考えており、それは生命の流れといったものと類比的である。それが外形的に個人という知的な枠組みに嵌めこまれれば、近代的な意味での静的で確たる自我を持つ個人が登場するように見えるのである
- 15) 「われわれの意識と他の様々な意識との分離が、われわれの身体と他の様々な物体との分離ほどに明確で無いのは、それらの分割を明確化しているのが空間であるから」PM1273ということになる。あるいは「自然の中には絶対的に切り離されるような個性性 *individualité* もない」EC530-531 のであり、「切り離された個体の間を生命がなおも流れている」EC714
- 16) Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 1959, p.124
- 17) 自己自身への合致という点では美的直観 *intuition esthétique* も神秘的直観も同質的である。「芸術家が、ある種の共感 *sympathie* によって対象の内部に身を置き直し、直観の努力 *effort d'intuition* によって、空間が彼とモデルの間においた障害を取り下げながら、再び把握しようとしているのはこの生命の意図 *intention de la vie* なのである」EC645
- 18) Jean-Louis Vieillard-Baron, « *Le mysticisme comme cas particulier de l'analogie chez Bergson* » in *Bergson et la religion*, PUF, 2008, pp.239-240
- 19) 「内的経験 *expérience intérieure* に道を開くためには障害物を取り除く *déblaiement*」ことをしなければならない。「直観の能力はわれわれ一人ひとりの内に実在する」が、「より生活に有用 *utiles* な機能によって覆われている」PM1289
- 20) Jean Nabert, *L'expérience intérieure de la liberté et autres essais de philosophie morale*, PUF, 1994, においてナヴェールは神秘的直観と哲学者はじめその他の直観一般との同質性に言及している

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

La conception de l'intuition chez Bergson

— sympathie, intuition mystique —

Yusuke TANAKA

Bergson a établi une conception de l'intuition qui est propre à sa philosophie tout au long de ses ouvrages. Dans sa philosophie, l'intuition est définie comme une méthode pour saisir exactement la durée, l'expérience intérieure. Quand Bergson fait mention de l'intuition, c'est pour viser premièrement la durée intérieure, surtout celle du moi. Pour lui, la durée n'est pas d'ordre intellectuel, ce pourquoi il devait cultiver une nouvelle méthode philosophique.

L'intuition ne s'interprète pas seulement comme saisie de soi-même mais de la chose extérieure. La portée de l'effet d'intuition comprend l'objet extérieur. Il s'agit d'expliquer comment définir une conception de l'intuition qui puisse tenir compte de la durée intérieure et pareillement de l'objet extérieur. Le but de cet article est de l'éclaircir précisément.

Pour examiner la signification de l'intuition, nous nous référons à l'interprétation de David Lapoujade, qui analyse particulièrement la relation entre intuition et sympathie. L'intuition est la condition de la sympathie, laquelle élargit en retour le domaine de l'intuition. Nous avons donc besoin de penser la sympathie pour traiter de l'intuition. En plus, Lapoujade considère que si la relation entre ces deux concepts est possible, c'est grâce à l'analogie entre notre durée et celle de l'univers.

Nous parcourons finalement *Les deux sources de la morale et de la religion* pour vérifier si cette analogie existe en fait et aboutissons à la conclusion qu'elle est confirmée par la mystique et l'effet d'émotion qui se fonde sur la mystique.